

恋姫バサラ 革命 呉編 紅き虎と天の御遣い

双龍

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

少女と呼ばれ天の遣い北郷一刀と虎たちの出会いが三国の運命を大きく変えることとなる。

1 0 話	9 話	8 話	7 話	6 話	5 話	4 話	3 話	2 話	1 話
49	45	37	31	28	23	16	9	4	1

目  
次

## 1話

関ヶ原の戦いが終わり日の本には安寧の時が訪れていた、その中で甲斐の武田道場では今日も二人の男の暑い声が響いていた。

「お館様」

「幸村」

「お館様！」

「幸村！」

「お館様!!」

「幸村!!」

「おー館様!!」

「ゆーきむら!!」

道場ではこの道場の師範でもある武田信玄とその弟子である真田幸村が互いを殴り合っているいつもの光景があった、それを道場の縁側で涼しい目で見ているのは幸村の忍の猿飛佐助だった。

「お館様もダンナもよく飽きないねえ、俺様このノリだけはついていけないわ」

佐助が呆れた顔で二人を見ていると、後ろの庭に人の気配があるのに気付いた佐助は甲賀手裏剣を構えて振り返った、すると佐助の後ろにいたのは年端もいかない少女で、手には何か丸いものを持って立っていた。

(俺様に気付かれないように庭へ入るなんて侮れないな)

佐助が考えていると信玄も幸村も少女に気付いたようで武器を持って佐助に近づいた。

「佐助あの小娘は？」

「さあ？まあ俺様に気付かれずにこんなところまで来れるんだから只者じゃないことは確かすつね」

「某には只の娘に見えるが・・・」

三人が少女を警戒していると少女はゆっくり信玄たちに向かって歩いてきた、信玄は佐助よりも前に出て少女に質問をした。

「お館様危ないですよ、俺の後ろに」

「大丈夫じゃ怪しい気配はせん、何者じゃ？小娘」

「甲斐の虎、武田信玄殿とお見受けします」

「いかにもワシが武田信玄よ、してワシに何用じゃ」

「申し訳ありませんが話している時間はありません」

少女がそう告げると少女が手に持つ丸いものが急に光った。

「お館様!？」

「ぬう!？」

その光に信玄だけではなく、幸村と佐助も一緒に飲み込まれ光が消えるとそこには少女だけしかおらず、信玄たちがいなくなっていた。

「運命をどうか変えてください、紅き虎たちよ」

一人の女性が城壁の上から満天の星が輝く空を見上げていた。

「炎蓮様ー」

城壁の階段を名前を呼びながら上がって来るものがいた。

「こんなところに居られたか・・・大事な評定の最中ですぞ」

上がって来たのは背の低い少女だった、すると背の小さな少女が探し人を見つけると溜め息をつきながら、その探し人の元に近づいて来た。

「おう雷火か、下らねえ会議を長引かせたって良いことなんかあるわけねえだろ？なんなら星を見てた方が楽しめるってもんだ」

「全く勝手な、中身は何時までも悪ガキのままですな」

「うるせえババア」

「誰がババアか!!」

二人が言い争っている流れ星が落ちていくのが見えた、しかしそれは普通の流れ星ではなく大きい流れ星と小さな流れ星が全く同じところに落ちていったのだ。

「今のは・・・」

「占い通りだな、面白え」

「占いとは官輅の占いの事ですか？」

「ああ、大陸に天の遣いと紅き虎が舞い降りるってな、天の遣いってのも気になるが、江東の狂虎の俺としては紅き虎の方が気になるぜ・・・雷火、雪蓮と祭に流れ星が落ちたところを見に行かせろ、それで誰か

居たら連れ帰って来いとも付け加えとけ」

「全く何物かもしれない流れ星を見に行かせるなど時間の無駄ではございませんか」

「下手な評定よりは面白えよ、良いから早く行かせろ」

「やれやれ分かりました」

張昭は渋々城壁を降りて命令を伝えにいった、城壁の上では孫堅が笑っていた、まるでオモチャを見つけた子供のように、今この大陸に二匹の虎が合間見えようとしていた。

## 2話

張昭は早速孫策と黄蓋に孫堅の命令を伝えた、そして孫策と黄蓋は支度を整え流れ星の調査へと向かうため城門の前に居るのだった。

「祭悪いわね母様のワガママに付き合わせちゃって」

「いやいやワシも長い評定で退屈しておったところ、むしろ炎蓮様には感謝しとるわい」

「じゃあそろそろ行きましようか、何時までもここにいと星じゃなくて母様の怒りが降ってきそうだし」

「ふふ、そうじゃな」

そう言うのと二人は馬を走らせて星が落ちたであろう場所に向かった、そして二人が星が落ちたとされる草原にたどり着いたが、回りをぐるりと見渡しても星らしきものは見当たらなかった。

「それらしきものは見当たらないのう」

「祭、貴女落ちた星を見たことあるの？」

「いや、ござらん」

「そうでしょ、ざっと見ただけじゃ分からないわよ、二手に別れましょ、その方が効率がいいわ」

「了解した、なら見つかったも見つからなくても一刻後にまたここに集合という事でよろしいか？」

「ええそうしましょ」

「それと策殿ここは劉耀の勢力圏、くれぐれも油断されぬようにの？」

「ええ分かつてるわ」

二人は話が終わると別々の方向に馬を走らせて星を探しに向かった、孫策は草原を進むが星らしいものは確認できなかった、孫策が星を探して辺りを見回していると後ろから馬の蹄の音が聞こえて孫策は振り返った、すると目の前には馬に乗った騎馬武者の女性が一人立っていた。

（参ったわね、祭にあれだけ言われてたのに見つかったわ、あとはこの子が劉耀と関係なければいいのだけれど・・・）

「貴女は何者なのかしら？」

「人に名前を聞くときはそつちから名乗るのが礼儀じゃないかな？」

「そうね、でも名乗れないわ」

「ならこつちも名乗らないよ」

「何をしにここへ来たの？」

「アタシは星が落ちたつていうから、主から見てくるように言われたの、で星を探してたらアンタに会ったつてわけ」

（参ったわね、目的はアタシと同じで、しかも劉耀の手の者、嫌な予感が当たつちやつたわね、なら取る手は一つ!!）

孫策は次の瞬間騎馬武者に向かって剣で斬りかかった。

「うわつといきなり!？」

騎馬武者は何とか自分の武器で受け止め、二人はつばぜり合った。

「卑怯とは言わないわよね」

「まさか、常在戦場が信条だもの」

自分の咄嗟の攻撃に騎馬武者が反応したのを見た孫策は、久々に自分を楽しませてくれる相手が見つかったと思いき血がたぎっていた、そして騎馬武者も孫策の攻撃に武人の血が騒ぎ孫策との戦いを楽しもうとしていた。

孫策が騎馬武者と戦いを始める前、信玄たちは広い草原に横たわっていた、そしてその横には見慣れない白い服を着た少年も倒れていた、すると信玄が一番最初に気がつき辺りを見回した。

「ここはどこじゃ？甲斐の城ではないな、あの銅鏡を持った娘も居らぬし、ん？この小僧は何者じゃ？」

信玄は幸村たちと一緒に倒れている白い服の少年に目が止まり、ゆっくりと近づいた、そして間近まで近づくと少年の身なりをじっくり観察した。

「見たこともない着物よ、歳は・・・幸村と同じくらいか少し下といった所か、このままでは埒が明かぬな起こしてみるか、おい、起きんか」  
信玄は少年に声をかけ起こそうと声をかけた、すると少年は目を覚まし体を起こし立ち上がると信玄の方を向いた。

「起きたか小僧」

「は、はあ、ここはいったい何処ですか？それとあなたは誰？」

「人に名を訪ねるときは自分から名乗るのが礼儀ではないか？」

「は、はいすいません俺は北郷一刀、聖フランチェス科大学園の学生です」

「せいふらんちえすか？聞いたこともないな、異国の言葉か？、まさか？、おいお主ザビー教という言葉に聞き覚えはないか？」

信玄は聖フランチェスカの言葉の感じからして現在九州の国主大友宗麟が広めようとしているザビー教の信者ではないかと思った。

「ザビー教？聞いたことないですが」

（嘘はついておらんようじゃな）

「すまなんだな、質問ばかりして、ワシは甲斐の虎武田信玄と申す、こっちに倒れているのはワシの臣下の真田幸村と猿飛佐助じゃ」

「た、武田信玄!？」

「ん？流石にワシの事は知っておるのか？」

「そりやもちろん有名な戦国武将の一人ですから、ですが本物ですか？」

「無論じゃ、貴様ワシが偽物だと思うてか!!」

信玄は一刀の言葉に少しの苛立ちを覚え、闘気を一刀に向けた、すると一刀の額からは汗が止めどなく溢れ足が震えていた。

（!?す、凄い闘気だ、じっちゃんのに少し似てるけど比べ物にならない、やっぱり本物の武田信玄か？）

（ほう、ワシの闘気に触れて立っているとは、こやつ中々の人物かもしれないな）

信玄は剥き出しの闘気を仕舞い一刀の肩に手を置いた。

「小僧、中々根性があるな見直したぞ、ところでここは何処だかお主は分かるか？」

一刀は辺りを見回したが自分が居た所とは随分違う場所なので首を横に振った。

「ワシを知っておると申したな」

「は、はい武田信玄と言えば甲斐の国を治めていた国主で、風林火山の兵法を使う戦国の歴史上でもかなり有名な武将ですから」

「歴史上じゃと？」

「はい、俺の住んでいる時代よりも遥かに前の時代の人物ですから、信玄さんの事は本で読んだことがあるぐらいです」

「なるほどワシ等よりも未来から来たというわけか」

「ただ」

「ただ何じゃ?」

「俺が知る歴史だと信玄と幸村は一緒に戦うことはなかったかと」

「ふむ、お主の世界ががワシ等の世界の未来にはならぬということか」

「多分、似てる所もあるみたいですけど別の世界なんじゃないかと」

「しかし、ここはいつたいどこじゃ?、一刀の世界でもなく、ワシ等の世界でもない」

「信玄さんはどうやってここに?」

「変な娘がワシ等三人の前に現れてな、その娘に突然銅鏡を見せられ、銅鏡が光輝きワシ等は光に包まれそして気づいたらここに居たというわけよ」

「銅鏡・・・」

「どうかしたか?」

「俺も博物館で銅鏡を見ていたら光に包まれてここに来たんです」

「やはり鍵は銅鏡じゃな」

「ZZZZZ」

信玄の後ろからイビキが聞こえてきた、信玄はため息を吐くと、後ろに振り向き地震を起こす程の大声で怒鳴った。

「起きんかー!!、バカものども!!」

「お館様!?!」

「五月蠅いな・・・」

「す、凄い声」

寝ていた幸村は飛び起き、佐助はゆっくりと目を擦りながら起きた、一刀は突然の地震で倒れてしまった。

「ここは何処です?」

「ここは甲斐の屋敷ではないな」

「うむ、ワシもまだ何もわかってないが、ここがワシ等の世界ではないことだけは確かじゃ、それとこの男の世界でもない」

信玄は倒れた一刀を首根っこを掴んで起こした。

「誰だ？」

「見たことがないな」

「北郷一刀です」

「一刀は未来の日本から来たそうじゃ、しかしその世界はワシ等の世界とはまた別の世界のようじゃ」

「うくん分かるような、分からないような」

「某は何が何だか」

「まあお互い別の世界から来たということじゃ幸村」

「なるほど、某は真田源二郎幸村と申す、北郷殿よろしく御頼み申す」

「俺は真田の旦那の忍で猿飛佐助、よろしくな」

「さて、ここで止まっても仕方があるまい、佐助、幸村！、そろそろ行くぞ」

「はっ」

「お主はどうする？」

「え？」

「ここにいるか？それともワシ等と一緒に来るか？」

「・・・行きます、俺も一緒に連れて行って下さい!!」

一刀は覚悟を決めて信玄たちについていくことを決めた、その時の一刀の目を見た信玄はフツと笑うとついていくことを許可した、天の御遣いと甲斐の虎の冒険が今始まる。

### 3話

信玄達は草原を進んだ、すると少し先から武器のぶつかる音が聞こえてきた。

「止まれ！」

「どうしたんですか？」

「武器のぶつかり合う音じゃ、佐助先に行つて様子を見てきてくれ」

「御意」

佐助はそれだけ言うのと偵察をするため、信玄たちの前から消え偵察に向かった。

「幸村気を抜くでないぞ」

「はっ、お館様」

「一刀お主は戦えるのか？」

「じいちゃんから剣道は習いましたけど、人を斬るための武術じゃないので」

「一刀よワシ等から決して離れるでないぞ（一刀の世界は平和なようじゃな）」

一刀はコクリと頷くと偵察に行つた佐助が現れた。

「どうじゃつた佐助」

「戦つてる人数は二人しかも相当な手練れですなあありや」

「そうか、お主は分身じゃな？」

「はい」

「なら本体に伝えよワシ等もそつちに向かうから引き続き見張るようにな、とな」

「御意」

佐助はそう言い残すと信玄たちの前から再度姿を消した、そして信玄たちも佐助の待つ場所にゆつくりと向かった、そして少し進むと鋼のぶつかる音が大きくなっていった、すると信玄たちの少し先に二人の女将が戦っているのが見え、少し離れたところの物陰に佐助が隠れているのが見えたので、信玄たちはまず佐助に近づいた。

「どうじゃ佐助」

「俺様が来たときにはすでに戦ってましたからね」

「そうか、それにしても報告通り二人とも中々やるわ」

「はい、武人の血が騒ぎますな」

「どうしますお館様、止めます?」

「止めるのも惜しい戦いじゃがここが何処だか早く知りたいからな、ワシが行ってくる幸村達はここで待て」

信玄はゆっくりそして堂々と孫策たちに近づいていった、すると二人は突然戦いをやめ近づいて来る信玄に目を向けた。

(凄い闘気だわ、まるで母様が目の前にいるみたい、この子に加えてこんな化け物みたいな奴も相手にしなきゃならないのかしら)

(何この人、凄い闘気まさかこいつの仲間!?)

二人は互いの顔を一回だけ見ると、すぐに信玄に目を向け武器を構えた。

「そう身構えるな、何も勝負をしに来たわけではない、ここは何処だか尋ねたくてな」

二人は信玄が戦う気は無いと言っても構えを解かなかつた、すると信玄の間に騎馬武者の女の子が答えた。

「ここは揚州刺史劉耀様の勢力圏だよ」

(劉耀じゃと? 何かの冗談か?、いやこの娘の目冗談を言っているようには見えん)

信玄が考えていると、今度は孫策が信玄に剣を向けて問いかけた。

「今度はアタシからの質問よ、貴方は何処の誰?」

「さつき武田信玄と名乗ったが?」

「その名前に聞き覚えがないわ、貴方の闘気を持った武人ならこの大陸に名前が通っていてもおかしくない、でも私は貴方の名を初めて聞いたわ、さあ私の問に答えなさい!!」

(ほう、この娘中々の覇気を持つておるわ、まだ弱いがゆくゆくは国を納める器になるかもしれん)

信玄がそう考えていると今度は騎馬武者の女の子の方も信玄に武器を構えた。

「その問いの答え、私も興味があるなく答えてくれない?」

「ならば答えよう、ワシ等は自分の屋敷にいたが突如奇妙な銅鏡を持つ少女が現れ、その少女に銅鏡を見せられると光に包まれた、すると気づいたらこの先の草原で倒れていた、というわけじゃ」

「!?、この先に倒れてた?、じゃあ母様が見た星に乗ってきたってこと?あまりにも突拍子も無い話、簡単には信じられないわ、でもこの男が嘘を言っているようにも思えない・・・」

孫策は色々な考えを巡らせていた、だが騎馬武者の女の子の方は何がだか分からないといった表情をしていた、しかし二人とも信玄の話聞いたが武器を納める気配は無かった。

「武器を納めてはくれぬか?」

「無理ね、貴方の目を見て嘘を言っていないとは思うけど、内容が内容だわ」

(まあそうじゃろうな、ワシもこやつ等の立場なら疑う、なら!!)

信玄は突如バックステップをして二人から距離をとると斧を構えた。

「なんのつもり!?!」

「信じてもらえぬのなら武人の対話をしようと思うてな、お主もこうしたかったのではないか?」

信玄の突然の言葉に騎馬武者は武器を持つ手に力が入り、孫策はとくとケラケラ笑いだした。

「あらバレてたの?、実はさつきから貴方の鬨気に当てられてね、殺りたくてうずうずしてたのよ!!」

「ちよつとあんた」

「ごめんなさい、貴女との勝負は後回しにさせてもらおうわ」

孫策は騎馬武者に謝った、すると騎馬武者もニヤリと一笑いすると信玄に向き合った。

「悪いけど鬨気に当てられたのはアンタだけじゃないんだなくアタシもうずうずしてたんだよ、この順番は譲る気はないよ」

「ならば二人でかかってくるが良い、ワシはいつでも構わん」

信玄の言葉に岩影から見ていた一刀が幸村たちに問いかけた。

「幸村さん良いんですか!?!信玄さん一人で」

「お館様がお決めになったこと、某は口を挟めぬ」

「そんな、佐助さん」

「まあ、問題はあの綺麗なお嬢さんたちが大変なことになるってことだけかな」

「え?」

「まあ黙って見てなって事だよ」

心配する一刀とは裏腹に佐助は信玄の心配を全くしておらず、それどころか相手の心配をしていたのである。

「さあ遠慮せず二人で来るがよい!!」

「そうね、なら遠慮なくそうさせてもらおう?」

「どっちも譲らないんじゃないやそうするしかないね、でもアンタとの決着はこいつを倒してから必ずつけるよ」

「挑むところよ!!」

二人は鬨気を剥き出しにし信玄に向かっていた、信玄も二人を迎え撃たんと斧を持つ手に力を入れた。

二人は出会ったばかりとは思えないコンビネーションで信玄相手に間髪いれない攻撃を繰り出していた、しかし信玄はそれをすべて防御していた。

(鈍重なデカイ斧を持ってるわりには素早い防御ね)

(アタシもコイツもそこそこ出来る方だと思ってたけど、この人は格が違うね)

(斬り合っていたとは思えないほどの息の合いようじゃな、しかし床にこもっていたせいかな身体の動きがやはり固いのう、そろそろ大技を繰り出すとするか)

信玄は渾身の力で斧を横に振り二人を吹き飛ばし、無理矢理距離をとった。

「疾き事風の如し!!」

「!?!」

信玄は斧を振りかぶると自身を独楽のように回しながら孫策たちに迫った。

「くっ!?!」

「!?」

孫策たちは突然の信玄の攻撃に防御した、しかし攻撃の勢いに押されて二人とも弾き飛ばされた、信玄は孫策たちを弾き飛ばすと回転を止め今度は斧を縦に振りかぶった。

「追撃よ!、動かざるごと山のごとし」

信玄は振りかぶった斧を地面に向かって振り下ろした、すると孫策たちが落ちる地点の地面が隆起し地面が盛り上がった、そして孫策たちは盛り上がった地面に打ち上げられ受け身もとれず地面に落ちた、すると信玄はゆつくりと孫策たちに近づいて来た。

「くっ!?(やつぱり母様と一緒に次元が違う)」

「いたたた、ヤバイねこりゃ」

信玄と自分達の実力の差に二人は恐怖した、そして信玄は孫策たちの間近まで迫ってきた。

「少しは落ち着いたか?」

「へ?」

「大方ワシがとどめをさすと思っておったのじゃろうが、先程も言ったようにワシはここが何処だか知りたいだけよ、負けたと感じたのなら教えてはくれんか?」

信玄の言葉に孫策は戦意がなくなってしまう武器を下ろした、それと同時に騎馬武者も武器を下ろし、隠れていた一刀たちが信玄に近づいて来た。

「そうね負けてしまったし、貴方の問いに答えましょう」

「助かる、まずはそなた等の名前を聞かせてくれ」

「私は孫伯符」

「私は、大史子義だよ」

「!?!?!」

(先程の劉耀の言葉でもしやと思っておったが、やはりここは過去の大陸か?、それにしても孫策かこれである覇気に納得がいったわ)

「そ、孫策!?!」

「あら?私の名をよく知ってたわね」

信玄たちは目の前にいるのが古の名将として名高い孫策や大史慈

と聞いて素直に信じることはできなかつた、それもそのはず孫策たちが活躍していたのは信玄たちよりも前の時代で国も違うそして一番の違いは信玄たちの知っている孫策たちは男なのである。

(しかしこの者たちの目は嘘を言っておらん、時を越えてきた一刀が居るぐらいじやから、時をワシ等が越えたぐらいでは驚かんが、孫策たちが女とはな)

「ど、どういう事なんだ・・・」

「一刀よ、お主も孫策たちを知っておるのじやな、しかもそれは男だろ  
う?」

「信玄さんの方もそう何ですか?」

「うむ」

「佐助、某はさらに混乱してきたぞ」

「大将じやないけど俺様も・・・」

「ちよつと何なのよ」

幸村たちが孫策たちの事で頭が混乱していると孫策がしびれを切らして話しかけた、すると信玄が驚いている理由を正直に孫策と大史慈に話した、自分たちが別の世界から来たことや、自分たちの知る孫策たちが男であることなど孫策たちに話した。

「アタシたちが男とはね、ぶっ飛んだ話ね」

「ワシもそう思うが、お主の目は嘘を言っておらん、それにその覇気も江東の小霸王の孫策ならば納得がいく」

「江東の小霸王・・・良い通り名ね、まあ貴女が別の世界から来たのは納得がいったわあの実力だもの」

「ふっ、あの程度まだまだよ、ワシは少し前まで床に伏せておつてな  
まだ身体が本調子ではないのよ」

「あれで本気じやない?、ますます異常よ、ところで貴方たち行くところはあるの?」

「いや」

「なら大史慈貴女はどうするの?」

「へ?」

「劉耀のところへ信玄たちを連れていくんじやないの?」

「うゝん」

大史慈は君主である劉耀に流れ星を回収してこいと命じられたが、信玄たちの事を上手く説明する自信が彼女にはなかった。

「貴女が迷ってるなら私が連れていくわよ?、どう信玄?」

「今は少しでも情報がほしい、それにお主とは縁もあるしな、お主についていこう、お主等もそれでよいな?」

「今回はあんたに譲るよ、劉耀様には何もなかったって報告する」

「あら?ほんとは良いの?」

「うん、それにあんたのお仲間も来たみたいだし」

大史慈が孫策の後ろを指差すと黄蓋が馬に乗って走ってきた。

「策殿ー!!」

「じゃあアタシは行くよ、孫策、次は負けないよ」

「ええ大史慈、アタシも貴女には負けないわ」

大史慈は馬に乗り孫策との再戦を約束し去っていった、すると黄蓋が馬を降り孫策に近づいた。

「策殿ご無事ですか?」

「ええ公覆」

「この者たちは?」

「流れ星の正体よ」

「何と!?!、ではこの者たちが天のみ遣いと紅き虎ですか?」

「ええ一緒に来てくれるそうよ、信玄彼女は宿将の黄蓋よ」

(ほう、この者が呉の宿将黄蓋か)

「黄公覆と申すよろしく頼む」

「ワシは武田信玄、隣にいるのはワシの臣下の真田幸村と猿飛佐助じゃ、そしてこの若者は」

「北郷一刀と言います、よろしくお願いします黄蓋さん」

(この者たち北郷以外は凄い闘気を秘めておるわ、大殿の行ったとおり面白いことになりそうじゃ)

黄蓋はこれから起こるであろう出来事に心を踊らせていた、そして孫策たちは信玄たち共に建業に向かった。

## 4話

信玄たちは孫策たちに案内され孫堅の待つ建業を訪れていた、そして信玄たちは城に向かうため城下町を歩いていった。

(城下も中々の賑わいよ、流石は江東の虎孫堅、益々会うのが楽しみになってきたわ)

そんなことを考えながら信玄は程なくして孫堅の城に入った、すると早々に玉座の間へと通されることになった、そして信玄たちが玉座の間に入るとそこには孫策や黄蓋の他に新たに四人の女将が待っていた、一番奥の玉座では一人の女将が鎮座しており信玄に声をかけた。

「俺は江東の狂虎と呼ばれている孫堅だ、お前等が天の遣いと紅き虎か?」

「天の遣いは知らんがワシが甲斐の虎、武田信玄よ」

「某は臣下の真田幸村にごさる」

「同じく猿飛佐助」

「俺は信玄さんたちとは別の世界から来ました、北郷一刀って言います」

「(四人とも良い目をしてやがる) なら今度はこっちの紹介だ」

「ワシは文官の張子布と申す」

「同じく周公謹です」

「同じく陸伯言と申します」

「私は武官の程徳謀でございます」

(張昭 周瑜 陸遜 程普、皆呉を代表する者ばかりよ、しかしやはり皆女か)

孫堅は急に椅子から立ち上がると信玄の方へ覇気を剥き出しにして近づいて来た。

「殿?!、まだ何者かも知れぬものに近づくなど」

「うるせえな大丈夫だよ」

(凄い覇気よ、江東の狂虎の異名は伊達ではないと言うことか)

張昭の心配をそっちのけに孫堅は信玄の間近に立ち、信玄の目を見

つめた、信玄も不適な笑みを浮かべながら孫堅から目をそらさなかった。

「ふっ、俺の覇気を真っ向から受けて動じねえとは中々やるな、それにお前の臣下もその小僧もな」

「ふっ、幸村も佐助もワシが鍛えておるこの程度で怯みはせんわ、それにこの小僧はワシが認めた男、この程度でへたるようでは話にならん」

「なるほどな、それにしてもおめえもすげえ覇気だな、どうだ？、俺と一勝負してみねえか？、雪蓮はやられちまつたみてえだが、俺はそうはいかねえぜ」

「望むところよ、ワシもお主の実力を測っておきたいと思っておった」  
「偉そうに、まあその威勢が口だけでないことを祈るぜ」

孫堅と信玄は戦うため玉座の間を出ようとした、すると張昭が行く道をふさいだ。

「何だ子布？」

「頭をお冷やしになさいませ、誰とも知れぬものと私闘など、君主のやることではありませんぬ!!」

「子布悪いがこれだけは譲れねえ、どけ!!」  
「!？」

孫堅が張昭に向けた鋭い目と覇気はまさしく、戦場で江東の狂虎と恐れられた孫文台の物であった、流石の張昭もこの孫堅の勢いに圧されて道を開けてしまった。

「大丈夫？、子布」

「伯符様・・・ええ大丈夫です」

（久しぶりに母様の本気の間を見たとわ、それにアタシも見てみたい、アタシが手も足も出なかった信玄相手に母様がどう戦うのか）

信玄と孫堅はそのまま城を出ていった、後に続くように玉座の間にはいた者たちも信玄たちの後を追った、信玄と孫堅は城下町も通りすぎ町から少し離れたところで対峙した、少し離れたところでは幸村たちと孫策たちが戦いを見守っていた。

「久しぶりだぜこんな高陽感は」

「ワシもよ」

「行くぜ!!」

最初に動いたのは孫堅だった、孫堅は自身の武器の南海霸王を使い信玄に間髪いれない攻撃を繰り出したが、信玄はそれを全て防御していた。

(先程の孫策と大史慈がやったことを一人でやるか)

「おら、防いでばっかじゃ面白くねえぞ!!」

「それもそうよな!!」

信玄は孫策たちにやったように斧を一振りして孫堅を吹き飛ばした。

「疾きこと風の如く!!」

「!?、面白え技だな」

信玄孫策たちにやったように回転しながら孫堅に迫った、すると孫堅は飛び上がり信玄の頭上から剣を突き刺そうとした、すると信玄は突如回転を止め斧で孫堅の攻撃を受け止めた。

「甘いわ孫堅!!」

「ちっ!!」

信玄は斧で孫堅を弾き飛ばした、すると孫堅はヒラリとバク中しながら着地し剣を構えた、信玄も斧を構え二人は黙ってお互いを見ている。

(流石に娘よりは強いな)

(ここまで強いとはな、こりや雪蓮じゃ勝てねえ筈だ)

「おい信玄」

「なんじゃ?」

「さっきお前疾きこと風の如くと言ったな?」

「ああ」

「それはもしかして俺の先祖の孫子の奴か?」

「ワシは孫子の軍略を元に風林火山という軍略を編み出した、だからお主の娘にワシと孫呉とは縁があると言ったのよ」

「なるほどな、ますます面白え!!」

孫堅はそう言うのと突如信玄に向かって突撃し、信玄も孫堅のを受け

止め二人はつばぜりあった。

「おい信玄」

「？」

「見せろよ風林火山全部、俺が全部破ってやるぜ」

「ならやってみよ!!」

信玄はまた孫堅を弾き飛ばした、すると今度は斧を地面に刺し鬨気を貯めた、孫堅はその隙を逃さんと着地と同時に信玄に斬りかかろうとした、しかし信玄はその攻撃をギリギリのところで防御した。

「静かなること林の如し」

「!?」

「続けて行く、侵略すること火の如く!!」

信玄は孫堅が攻撃した直後の硬直を狙い全身全霊の拳をお見舞いした、流石の孫堅もその攻撃に吹き飛ばされ地面を激しく転がった、そして土煙の中に孫堅の姿は隠れてしまった、その光景を見た孫堅の家臣たちは驚きを隠せなかった。

「大殿がここまでやられるとは・・・」

「ワシでも雷火でも見たこと無いのう」

「驚いちやうわね、？、孫策様どうかしましたか？」

程普は一言もしやべらず母の戦いを見ている孫策を心配した。

「何でもないわ徳謀、でも始めて見たわ母様のあんな楽しそうな顔」

「私もです、まあそれだけ大殿を満足させてくれる相手が私たちの中にいなかったということもあります」

「そうね・・・」

信玄と孫堅の戦いに一刀も開いた口が塞がらなかった。

「す、凄い・・・」

「床に伏せていたとは思えぬ動き流石はお館様、しかし孫堅殿もお館様にあそこまで風林火山を出させるとは」

「一方的な試合になるかと思っただけど、こりやお館様も油断したらヤバそうだね」

観ていた者たちははは目線を土煙の上がる方に戻した、殴り飛ばした信玄も土煙から目を離すことなく斧を構えていた。

「この程度ではあるまい孫堅よ、虎の本性を見せてみよ!!」

すると土煙の中から孫堅が立ち上がった、そして次の瞬間孫堅は剣を横に一閃し土煙を払うと、再度信玄に向かって突撃した。

「侵略すること火の如く!!」

向かって来る孫堅に対し信玄は全身全霊の力を込めた拳で孫堅を迎え撃った、それに対し孫堅は回避せず突撃の速度をさらに上げた、そして次の瞬間孫堅は信玄の拳を受けた、しかし孫堅は拳を受ける瞬間信玄の頭に向かって剣を振り下ろした、流石の信玄も攻撃の最中だったので首を少し動かすことしか出来なかった、孫堅は吹き飛ばされ信玄は兜の片方の角が斬れてしまった、しかし信玄はそれに構わず追撃をした。

「動かざること山の如し!!」

隆起した大地に孫堅は打ち上げられ受け身もとれず落下した。

「お館様!？」

「来るな幸村!!、ワシは大丈夫よ(ワシの攻撃を受けてもなお剣を振るとは、敵ながら見事よ)」

心配し信玄に近づこうとした幸村を信玄は制止した、そして信玄は幸村を止める最中も孫堅から目を離すことはしなかった、すると孫堅はボロボロになりながらもまた立ち上がった。

「ちっ、あれでもその兜の角を落とすのが精一杯かよ」

「あの攻撃少し驚いたぞ」

「へっ少しかよ、次元が違いやがるなやっぱり」

「どうするこれでやめにするか?」

信玄の言葉に孫堅は剣を信玄の方に向けて話した。

「俺はまだお前に一太刀も入れてねえからな、これで終いはねえだろ」

「ふっ、それでこそ国長の言葉よ」

「ふははははははは!!」

「ぬははははははは!!」

突如笑いだした孫堅と信玄に見ていた全員が驚いた、そして次の瞬間二人は互いに相手の名前を叫びながら突撃した。

「孫堅!!」

「信玄!!」

二人は互いに連続攻撃を繰り返した、しかし二人とも互いの攻撃をすんでのところで躲し、反撃の隙をうかがっていた。

(中々隙を見せやがらねえ)

(ここにきて孫堅の動きが良くなってきたな、ならばこちらから動いてみるとするか)

信玄は突如連続攻撃をやめ孫堅から少し距離をとった、そして斧を地面に刺し両手を斧の柄に乗せた。

(何をするつもりだ?)

「五行に常勝、四時に常位なし!!」

「!?」

信玄が言い終わると上空から突如隕石が孫堅に向かって降り注いだ。

「何もねえのに空から岩が降ってくるだ?!?どういう理屈だこりゃ」

孫堅は降ってくる岩を躲しながら信玄に向かって走った、それには幸村や佐助たちも孫堅の動きに目を見張った。

「お館様のあの技を躲すとは・・・」

「お館様も大概だが、あの孫堅って人も化け物だね」

幸村たちの隣で孫策たちも二人の行動に驚きを隠せずにいる。

「大殿ー!!、もうやめてくだされ!!」

「無駄じゃ雷火、大殿の耳には届いておらん」

「でしようね、見えてるのは敵の姿だけ」

「・・・母様」

孫堅は降り注ぐ隕石を躲し続け、ついに信玄の元までたどり着いた。

(あの攻撃を躲しきるか!?)

孫堅は無言で信玄に突きを放った、しかしその突きは信玄の頬をかすめるだけに終わった。

「ちっ!、今の俺にはこれが限界か・・・」

孫堅はそう言い残すとバタリとその場に倒れてしまった、すると試合を見届けていた孫策たちが孫堅に駆け寄ってきた。

「母様しつかりして!!」

「安心せい、骨は何本か折れとるかもしれないが命には別状ないはずよ、今は限界まで体力を使い寝とるだけじゃ」

信玄の言う通り孫堅からは寝息が聞こえていた、孫策たちはすぐに孫堅を医者に見せることにした、そして信玄の事は孫堅が起きてから決めることで両者納得した、その日は建業の城で一夜を明かすこととなった、夜信玄は皆が寝静まったのを確認すると一人で中庭に出て天を仰いだ。

(久しぶりにたぎった勝負であった、それにしても最後の孫堅の攻撃には驚いた、もう少しずれていればワシはここにはおるまい、あの小娘に飛ばされたこの世界中々楽しめそうよ、それに書物の上でしか見ることの出来なかつた人物たちと話せる、幸村にとつてもワシにとつても良い機会となるだろう、心配事があるとすればワシたちがいない間の甲斐だけじゃな、帰る方法も同時に探っていくとするか)

信玄はそう心に決めると自分の寝所に戻っていった、しかし彼はまだ知らないこれからこの世界で一刀や自分たちそして大陸の全員を巻き込む大乱が起こることを。

## 5話

信玄との対決の後孫堅は丸一日寝込み、信玄が目通りできたのは信玄がこの世界に来てから三日後の事だった、玉座の間には信玄たちや一刀孫堅の他にも呉の重鎮たちが顔を揃えていた。

「信玄、待たせて悪かったな」

「それは構わん、怪我の方はどうじゃ？」

「まあまだ痛むがもう大丈夫だほんとは昨日の時点でもう大丈夫だったんだが、ババアがうるさくてよ」

「何を言われる大殿、昨日あれだけ熱を出しておきながら」

「飯はたらふく食ってたろ？だから大丈夫だつうのに」

「ワシが止めないと止めるものは他におりませんからな」

「たく・・・でだ信玄よ、家臣やその小僧共々俺の城に住まねえか？」

「良いのか？」

「俺を倒せるくらいだ實力は申し分ないだろ、それに伯符から聞いたが別の世界から来てそこでは国長何だろ？」

「ああ」

「俺も同じ立場だからなお前の気持ちはよく分かる、俺たちのところにいれば、放浪をするよりか沢山の情報も入ってくる、どうだ？それにお前は占い通り紅き虎だったみたいだからな、そういえばこの話はお前らにはしてなかったな？」

「ああ、だがお主が床に伏せておる間、孫策から官路の占いの事は聞かせてもらった」

「そうか、でだどうする？信玄」

ニヤリと笑いながら孫堅は信玄に聞いた、すると信玄もニヤリと笑い答えた。

「ならば世話になるとしよう、幸村たちもそれで良いな？」

「無論にでございますお館様」

「俺様は構わないよ、回りはきれいな女の人ばかりだし」

「一刀はどうする？」

「俺は・・・」

「小僧お前は身なりから見て天の御遣いだろう、お前には信玄とは違うことと孫呉に手を貸してもらいてえ」

「どうゆう事ですか？」

「お前には孫呉の名だたる將に天の血を入れてもらう」

孫堅の言葉に一刀は意味が分からず首をかしげていたが、信玄はなるほどなど首を縦に振り孫堅の意図を分かっているようだった。

「ようするに俺や臣下、それと娘たち全員を抱けつてことだ」

「ぶっ!？」

孫堅の突拍子もない提案に思わず吹き出してしまった。

「大殿!?何を破廉恥な!!」

「流石は大殿じゃな」

「中々良い男じゃない、最初はお姉さんとどう？」

「あら、母様にしては良い提案じゃない」

「まあ大殿の言うことには一理ある」

「ですねぇ」

張昭以外の將たちは孫堅の提案に乗り気であった、そして幸村はただ孫堅の意図が分からず、佐助は吹き出そうな笑いを堪えていた。

「佐助、孫堅殿は何を言っておるのだ？」

「俺様が分かりやすく教えて上げるよ、耳貸して旦那」

佐助が幸村に孫堅の言わんとしてることを教えると、幸村は顔を真っ赤にした。

「な、なんと破廉恥な」

「幸村よ大事なことじゃ、天の御遣いがこの大陸に舞い降りる事は官路がこの大陸中に広めておる、そんな時孫呉が天の御遣いを拾った、これだけでも孫堅たちは天意を得たことになり漢室にも影響するだろう」

「そういうことだ、何だ？何か問題でもあるのか？一刀」

「い、いやないけど」

「バカ野郎、男ならこの状況喜ばねえか、てめえも金玉がちやんと二つ付いてんだろが!!」

「は、はい!!」

すると孫策が一刀に近づき孫堅の話に割って入った。

「安心しなさい一刀、うちの子達はみんな良い子ばかりよ、でももし抱くなら互いの了承を得てからになさい」

「了承なんか要らねえよ、なんなら俺とやるか？」

「え!？」

「もう母様、病み上がりなんだから後にしなさいよ」

「まあこれからする機会はいくらでもあるか、それじゃあ信玄、幸村、佐助、一刀、お前らを孫呉に迎える、それとお前らに預けたいものがある」

「預けたいもの？」

「俺たちの真名だ」

「真名とは何だ？」

「信玄たちの世界にはないのか、一刀の世界には？」  
「ないです」

「真名っていうのは俺たちの人となりを現した名だ、例えば相手の真名を知っていても相手の許しなく呼べば首を跳ねられても文句はいえねえ神聖な名だ」

「なるほど預からせてもらう」

「某も預からせていただく」

「俺様も」

「俺もです」

「まずは俺からだ、性は孫 名は堅 字は文台 真名は炎蓮だ、炎に蓮と書く」

「次はアタシね、性は孫 名は策 字は伯符 真名は雪蓮、雪に蓮で雪蓮よ」

「ワシは、性は黄 名は蓋 字は公覆 真名は祭じや、祭と書く」

「私は、性は程 名は普 字は徳謀 真名は粹怜よ、粹に伶俐の怜で粹怜」

「私は、性は周 名は喩 字は公謹 真名は冥琳だ、冥府の冥に珠を表す琳と書く」

「次は私ですう、性は陸 名は遜 字は伯言 真名は穩和の穩で穩

と申します〜」

「最後はワシか、性は張 名は昭 字は子布 真名は雷火じゃ、雷に火で雷火じゃ」

「さらに今別の用で建業を離れている俺の娘が二人と娘につけてる側近が一人、これが俺の臣下たちだ」

孫呉の自己紹介が終わると信玄たちも改めて名を名乗ることにした。

「ワシは甲斐の虎武田信玄よ、よろしく頼む」

「某は真田源二郎幸村にござる、孫呉の皆様よろしくお頼み申す」

「俺様は猿飛佐助、諜報なんかで役に立つよ、よろしく」

「俺は北郷一刀です、よろしくお願いします」

全員が自己紹介を終えると信玄たちは大陸の現状を確認しようとして冥琳に訊ねた。

「冥琳よ、黄巾党という名前を聞いたことはないか？」

「黄巾党・・・いや、聞いたことはありませんな、何故ですか？」

「うむ実はな」

「ちよつと待った!!」

信玄が続きをしゃべろうとしたがそれを雪蓮が遮った。

「信玄、貴方これから起こることを言おうとしてるでしょ？」

「そうだが」

「悪いけどそれは聞けないわ、それを聞いてしまうと視野が狭くなってしまう、それに貴方の知る歴史通りに進むとは限らないでしょう？」

「雪蓮!!」

すると後ろから雪蓮を叱咤する声が聞こえた、その声を発したのは誰であろう母の炎蓮であった。

「な、何?、母様」

「そんなんだからお前はまだ青いんだ、利用できるものは何でも利用する、それが孫呉のやり方だ信玄続きを話してくれ」

「うむ、黄巾党とは大教祖張角が率いている賊だ、そのほとんどは民草でな、頭に黄色い布を巻いていることから黄巾党と呼ばれている」

「頭に黄色い布!？」

「どうした？冥琳」

「い、いえ最近中央で信玄殿の言う者たちが現れたと斥候から報告がありました、ただいかんせん小規模で建業にも入っていないのでお耳には入れませんでした」

「黄巾党か・・・冥琳少しいつらの動向を探っておけ」

「御意」

「冥琳さん、俺様が斥候に出ようか？」

「ふむ、お前の能力を見るいい機会だな頼めるか？」

「勿論、お任せってね」

佐助はそう言い残すと皆の前から姿を消した、その行動信玄と幸村以外の者は驚いたが。

「流石に自分で諜報で使ってくれて言うだけはあるわね」

「これは期待が持てそうだな」

佐助が誉められたことで信玄も少し気持ちがよかった、すると一筋の気が信玄の背中を這い上がってきた。

「!?、この感じ・・・」

「どうした？信玄」

「やはりワシだけではなかったか」

場所は代わり建業と中央の国境近くの山の頂上に一人の男が立っていた。

「あなた様もこの世界に・・・」

その男の名は戦国の世界で信玄と幾度も死闘を繰り広げてきた上杉謙信であった。

## 6話

孫呉に信玄たちが加入して一月近くが経とうとしていた、その間信玄たちは大陸の文字を読み書きが出来るまでになっていた、一刀も信玄たちや冥琳たちの指導もあり軽い政務が出来るまでになった、そんなある日信玄は雷火と穩と執務室にいた。

「見事な案じや流石は信玄殿じやな」

「まあ、ワシの国でやっておった事ゆえ、少し修正は必要じやがな」

「そこは私にお任せください」

そして信玄は一通り政務を終えると執務室を出ていった、そして執務室には雷火と穩だけが残っていた。

「それにしてもあのお方は凄いですね、炎蓮様を武で退けるだけでなく、政務にも明るいとは」

「うむ、流石は大殿と同じく国長であったと言うだけの事はある、信玄殿の国も良い国なのであろうな」

「他の方も幸村さんは信玄さんに負けず劣らずの武をお持ちですし、佐助さんの諜報活動は目を見張るものがありました、一刀さんも信玄さんや私たちにはない意見を言ってくれます、炎蓮様の慧眼には感服ですう」

「そうじやな、これからも四人には孫呉のために力を貸してもらいたいものじや」

信玄は執務室から出ると中庭で鍛練する幸村とその相手をしている雪蓮を見つけた。

「流石は江東の小霸王と名高き雪蓮殿」

「貴方もかなりやるわね、ここまで楽しいのは久しぶりよ」

そして戦っている二人を見下ろすように建てられた東屋には冥琳が書類を広げ何かを考えていた、そしてその横には佐助が座りお茶を飲んでおり、信玄はゆっくりと近づいていった。

「佐助の報告によれば、信玄公の予想通り黄巾党は大きくなりつつあるな」

「この短期間であの大きさは流石の俺様も予想外だったね」

「中央でも目に見えて被害が出るようになった、そろそろ討伐隊も出されるだろうが・・・」

「その討伐隊が全部やってくれればいいけど、逃げられたらこの建業に流れてくるだろうな」

「うむ、ならば早急に対策をたてるとしよう、それにしてもお前の隠密能力には目を見張るものがあるな」

「そうかい？まあお館様の顔を潰すわけにはいかないからね、ねえお館様？」

「いい働きをしておるようじゃな佐助」

佐助の言葉と自分の後ろから聞こえる声に冥琳は急に後ろを振り向いた。

「信玄公、雷火殿や穏と政務の予定では？」

「予定より早く終わったのでな、少し散歩をしていたのよ」

「そうでしたか、しかし信玄公の仰る通り黄巾党は急激に成長してきました」

(やはりこの世界でも黄巾の乱は起こりそうじゃな)

「それでは私は黄巾党に対しての策を考えねばなりませんのでこれにて」

「うむ・・・佐助」

冥琳が去つたのを確認すると信玄は声のトーンを落とし佐助を呼んだ。

「どうしたんですか？」

「ワシの勘が鈍っていないのであれば恐らくだが、謙信がこの世界に来た」

「上杉が・・・」

「あやつの気配がするのじゃ」

「調べましょうか？」

「いや、まだいい」

信玄はそう言うと佐助の元をゆっくり去っていた、佐助は空を仰ぎ眩いた。

「かすが、お前も居るのか？」

その次の日の早朝朝霧が立ち込める中信玄は中庭で一人武器を振り鍛練をしていた。

(謙信よワシが感じたぐらいじゃお主もワシがおることに気がついていよう、少しでもこの鈍った体を元に戻しておかねばな)

信玄が斧を振り抜くと人の近づく気配がし、信玄は武器をおろした。

「なんだ？やめるのかよ信玄」

「炎蓮か」

「こんな朝早くからどうしたんだ？」

「この世界にワシの宿敵が現れたようなのじゃ」

「へえ、おめえの宿敵って言うぐらいだから強いんだろうな」

「ワシの世界では軍神と謳われてる男よ」

すると炎蓮はすたすたと歩き自分よりも二回りぐらい大きい岩の前に立った。

「ふん!!」

「!？」

次の瞬間炎蓮は自分の武器に炎を宿しその岩を真つ二つに見せた。

「おめえの攻撃を参考にしてな、少し前にやつと完成したんだ」

(見ただけで真似ができるとはやはり武に関しては天賦の才がある)

「おめえの世界の者どうしの決闘に興味がある、やる時は俺も連れてけよ」

「分かった」

話を終えると信玄と炎蓮は上る朝日を見ながらこれから始まる闘いに闘志を燃やしていた。

## 7話

黄巾党が大きくなっていくという情報を炎蓮たちが手にしてから二月が経とうとしていた、そんな頃都では大きくなった黄巾党を掃討するため討伐軍が出された、しかし結果は張角を討てず黄巾党の大部分がバラバラに中央の外に逃がすという最悪の結果となった、しかし都の軍はこれを追撃することはせず、逃げこんだ州の州牧に全てを任せるといふ書面を各州牧に渡した、それは建業の炎蓮にも届いており、その事で建業では緊急の軍義が信玄たちや一刀も交えて行われていた。

「なんなのよこの内容は、ようはバカな官軍の尻拭いをしろってことでしょ!!」

「うるせえぞ雪蓮、少し黙ってろ」

炎蓮の怒気を孕んだ言葉に雪蓮は言葉を飲んで黙ってしまった。

「冥琳うちに逃げ込んできた奴等の規模はどのぐらいなんだ？」

「官軍が相手にしたのは五万でしたがそのうち一万を討伐したと聞いています」

「まどろっこしい話はいいどのぐらいなんだ」

「・・・およそ二万といったところですが、他の二万は他の州に流れたようで」

冥琳の言葉にその場にいるものたちがざわめいた、しかしその中でも信玄や幸村炎蓮は何かを考えているようだった。

「今佐助に規模を確認するため偵察に出てもらっています、あやつの足なら明日には正式な数が分かるでしょう」

「今賊は何処を根城にしてやがるんだ？」

「都との州境の山です」

「あそこかあの山はデカいからな二万ぐらい入るな・・・よし今から軍を編成して退治してやるとするか!!」

「お待ち下さい炎蓮様!、今佐助が調査に行っているのです」

「まどろっこしい、俺が一暴れすれば解決する事だろ」

「母様何も討伐しないと云ってるんじゃないわよ、今佐助が調査に

行ってるんだから、それを待っても遅くないわ」

すると今まで黙っていた信玄が口を開いた。

「炎蓮よここは雪蓮や冥琳の言うことに一理ある、相手は少なく見積もって二万、対してワシ等の兵力はかき集めても一万五千といったところだろう、五千の兵力差で相手は高所に陣取っている、相手の方が一枚上手よ、ここは佐助の情報を待つべきじゃ」

信玄の言にその場にいたものたちはこぞって頷いた、流石の炎蓮もそれに折れ佐助の情報を待つことにした、そして次の日の朝早く佐助が情報を持って帰還し軍義が開かれた。

「報告せよ佐助」

「・・・」

「どうした?」

「それがですねお館様いなかったんですよ」

「何がじゃ?」

「二万の黄巾党が、いや実際にはいたといった方がいいかな?」

「まどろっこしいぞ佐助、見てきたままを話せ!!」

「俺様が山に着くとそこには戦った跡はあるんだけど黄巾党がいなかったんだよ」

「死体はあったのか?」

「ありません」

(あそこの山には山村がいくつかある、それにしても暴徒化した賊を民だけじゃ潰せねえだろ)

「でもそれだけじゃなくてさ、山に入ろうとしたら・・・」

「したらなんだ?」

「かすががいました」

「な、何と上杉の忍殿が!?!」

「・・・そうか」

すると信玄は自分の武器を持って玉座の間から出ようとした。

「おいちよつと待てよ」

「何だ?」

「かすがってというのは誰だ?」

「この間話した、ワシの宿敵の剣と呼ばれているおなごよ、恐らく二万の黄巾党を破ったのは謙信の奴よ」

「二万を相手にして勝つとはな、流石はお前が宿敵と呼ぶ男だな」

「謙信は義に厚い男よ、恐らく黄巾党は官軍に追いたてられ建業の土地に入った、そして近くにあった村に略奪に入りそこに謙信が通りかかり助けた、まあそんなところだろう」

「そんなことを簡単にやってのけるなんて」

「信じられん話だが佐助の情報と一致するな」

「ワシはこれから謙信のところに行つてくる」

「お館様、幸村もお供致します」

「好きにせい、炎蓮よお主はどうする？」

「この間言つた通りついていくぜ」

「ちよつと母様、得体の知れない奴がいるつていうのに」

「雪蓮の言う通り危険です炎蓮様」

「だから俺が行くんじゃねえか、この建業で一番強い俺がな、それに信玄が宿敵と言うほどの男だ会つてみてえ」

炎蓮の目を見た雪蓮や冥琳は止めても無駄だと思い首を横に振つてそれ以上は言わなかった。

「よし冥琳兵はいらねえ、佐助の話じゃ黄巾の奴等は確認できなかつた、人選は祭と雪蓮後補佐にお前の三人だそれでいいな？」

「ちよつと待つてください」

「一刀か、何だ？」

「俺も面子の中に入れてください」

「一刀よ震えておるぞ、無理はせずとも」

「行きたいんです、何故だかは分からないんですけど俺は信玄さんを見てなきやいけないような気がして」

信玄は一刀の言葉に少し驚いたが次の瞬間口を大きく開けて笑い出した。

「ヌアハハハハ、良かろう一刀よワシにどこまでもついて参れ」

「は、はい!!」

「なら一刻後城門の前に集合でいいな」

「分かりました、ならすぐに馬の準備をして参ります」

冥琳はそう言い残すと部下に命令するために玉座の間から出ていった、雪蓮と祭も武具の用意のため自室に戻った、そして一刻後城門の前には二体の馬ノ上に仁王立ちした信玄と、まだ一人で馬に乗れない一刀のために幸村が一刀と相乗りしていた、そして炎蓮たちが戦仕度を終え城門まで来ると信玄たちは馬を走らせ国境近くの山に向かった、信玄たちが国境近くの山に着いたのは昼過ぎの事で信玄たちは山に着くと馬で山道をかけ上がり程なくして山村に到着した、炎蓮が着くと村長らしき老人が炎蓮に近づいてきた。

「これはこれは孫堅様、ワシはこの村の村長にございます」

「この村に黄巾党が来たらしいな、村人は大丈夫か？」

「はい、偶然武芸者の方々が通りがかって下さり皆も無事にございます」

「そりやよかった」

「ご老体、つかぬことを聞くが武芸者は二人ではないのか？」

「全員で四人にございます、若い方が二人と女性が一人後ワシと同じぐらいの方が一人にございます」

（謙信に剣、若いのは前田の風来坊か？、それにしても後一人の老人が分からん）

「そいつらは今何処にいるんだ？」

「この山の山頂に祭りで使う広場があります、今は全員そこにいらっしやるかと」

「分かったとりあえず行ってみる、何か必要なものはあるか？」

「いえ、さいわい何処も壊されませんでしたから」

「そうかなら行くぞ」

信玄たちは村の奥へと進んだ、少しすると長老が言った広場が見えてきた、そしてそこには謙信とかすがさらに前田慶次がいた。

「来ましたね」

「待たせたな謙信」

「待ちましたよ甲斐の虎」

信玄と謙信は互いから目を離さず対峙しあつた、かすがはそれを微

妙な表情で見ている。

「どうしたんだい？かすがちゃん」

「いや、やはり謙信様を満足させる事が出来るのはあの男しかないんだなと思ってな」

「まあ、あの二人は特別だからね」

そして謙信を見た炎蓮たちは、謙信の鬨気に冷や汗が止まらずにいた。

「信玄の世界の奴等はどういつもやべえな」

「尋常じゃないわね、母様変な気起こさないでよ」

「ああ手は出さねえ、信玄との約束だからな」

すると森の中から重い足音が聞こえてきた、炎蓮たちは武器を即座に構え音のする方を見た。

「お本物の甲斐の虎じゃ、軍神どんの予言が当たったみたいね」

「なるほど最後の一人はお主だったか島津の」

炎蓮たちの前に現れたのは日ノ本で最強の名を欲しいままにしている鬼、島津義弘であった。

(こいつ、謙信や信玄よりもやべえな)

(なんなのこの人は身体が震えてくる)

(凄い鬨気よ、ワシでも立っているのがやつとじゃな)

(信玄公も大概だと思っていたがそれ以上の者がいるとは)

炎蓮たちが義弘の鬨気にあてられている中、義弘はゆっくり炎蓮たちちに近づいた。

「甲斐の虎このおなごたちは誰ね？」

「今ワシが世話になっておる孫家の者たちじゃ」

「孫家ちゆうことは・・・」

「一番前にいるのが孫堅、次に娘の孫策、髪が白いのが黄蓋、黒いのが周瑜じゃ」

「村長に聞いたとつたがほんとに三国の武将がおなごことは、しかし孫堅殿か納得じゃおいを食わんとする鬨気を出しとるわ」

「すまねえなあんたを見てたら勝手に出ちまう」

すると謙信と対峙していた信玄がフツと笑った後に言った。

「それもそのはずよ島津は日ノ本で鬼島津と恐れられ最強の称号を欲しいままにしている男よ」

「お前の世界の最強か・・・」

「がはははは、甲斐の虎に誉められるのは悪りかねえが、少し誉めすぎね」

「信玄」

「ん？」

「これからお前はそこにいる謙信で野郎とやるんだろ？」

「そのつもりじゃ」

「なら、鬼島津さんよ俺と勝負しねえか？」

「ほう、江東の虎直々の挑戦かね、よか島津義弘その勝負受けてたつ!!」

炎蓮が義弘に突然勝負をふっかけたことに雪蓮と祭はビックリしたが止めることはできなかった、何故なら自分たちも武人、義弘と相対したら勝負をせずにはいられないだろうと思ったからである、そして信玄も謙信との闘いを始めようとしていた。

「謙信よワシは長く床に伏せっておった、そのせいかこの世界に来ても本来の勘が掴めずにいた、しかしやはりワシの体に渴を入れるのはお主の太刀をおいて他になし」

「再開の記念に一勝負参りましょうか、甲斐の虎」

「鬼島津、ここにいとこイツらの邪魔になる、場所を移すぜ」

「よか」

炎蓮と義弘は信玄から距離をとるため広場から出ていった、雪蓮と祭と冥琳は炎蓮についていった、そして拓けた場所を見つけるとそこで勝負をすることに決め互いに武器を構えた。

「孫堅どんおいは手加減ば知らんがそのつもりね？」

「手加減なんていらねえ、全力で来い!!鬼島津」

「よか覇気ね」

信玄対謙信、炎蓮対義弘の闘いが今始まろうとしていた。

## 8話

義弘は身の丈以上の大剣を担ぎ炎蓮を威圧した、炎蓮は武器を構えたが義弘の気迫に微動だに出来なかった。

(剣を担ぐだけで闘気が倍は違げえとはな)

(担いだおいに近づけるのは真の武人だけね、孫堅どんおまはんはどげんね)

それを見ていた雪蓮たちも背中から嫌な汗が吹き出していた。

(剣を担いだだけでこれじゃ母様も迂闊には動けない)

(あの闘気を向けられ倒れずに武器を構えられるとは、流石は大殿じゃな)

(今ここにいる私たち全員が間に入ってもこれは止められんな)

義弘の威圧に炎蓮が動けずにいると義弘の方が炎蓮に話しかけてきた。

「どげんしたね？孫堅どん、まさかこの程度で臆したんじゃなかね？」

「ちげえよ、どんな風に殺ろうか考えてたのよ、でもダメだな」

すると炎蓮は突然武器を構えるのをやめた、しかし義弘は気を抜かず剣を担いだままだった。

「ダメとは何がね？」

「やっぱり戦いに頭を使うのは俺の性分じゃねえ」

「……」

「やっぱり俺は気分任せて剣を振るだけだ!!」

すると突如炎蓮は凄い速さで義弘の懐に入ると連続斬りをお見舞いした。

「ぐうう、強烈な連撃じゃ」

「当たると思ったが以外と素早く動かせるんだな、その剣」

炎蓮が攻撃をする一瞬で義弘は自分と炎蓮の前に剣を挟み攻撃を防御した。

「この太刀はおいの魂、そしてこの太刀と共にいくつもの苦楽を共にしてきた、こんぐらいは当然ね」

「流石は信玄の世界の最強だな、武器は己の一部か」

「厳密に言うとおいの世界には戦国最強の異名を持つ忠勝どんちゅう男がおつてな、二人で最強の名をかけて戦つとるのよ」

「当たり前だな最強つて言うならやつぱり一人だ」

「耳が痛い言葉ね、何度も忠勝どんとは勝負しとるんじやがいつこうに勝負がつかん、じやがおいは思つとるいつかおいと忠勝どんの勝負にけりばつけ古き時代をおわらせようと、そして願わくばおいは忠勝どんとの勝負に勝ち、おいは新しき時代に倒されたいとな」

「分からねえなどうしてそこまで若え奴等のためになれる？」

「おいはこれまで沢山の若もんの命をこの太刀で絶つてきた、そしておいにも死が近づいてきた、そうなたらの何か若もんのためになることをしたくなつたのよ、まあ老婆心ちゅうやつかね」

義弘はゲラゲラ笑いながら言ったが聞いていたものたちにはやけに悲しく聞こえていた。

(こんな人がいる、信玄の国の若い人たちは幸せね)

(島津殿、その気持ち良く分かりますぞ)

(だがこういう人物にこそ若い人間の育成をしてほしいと私は思うが)

雪蓮たちがそう思っていると炎蓮がフツと笑うと言葉を続けた。

「俺はまだそこまで思っちゃいねえが、確かにガキどものことは気にかかるからな、でもよ義弘ここはお前のいた世界じやないんだぜ？、ここでぐらい自分のために剣を振るってもいいんじやねえか？」

その言葉を受けると義弘は自分の太刀を見詰めた、そしてニヤリと笑うと剣を構えた。

「そうじやな久しぶりにおいのために剣を振るうのも悪かねえ、まさかこの年で道を示してもらおうとはの、感謝するど孫堅どん!!」

そう言うとき義弘は炎蓮に攻撃しようと向かってきた、炎蓮は出方を伺うため義弘の動きに集中した。

「行くどー!!示現流瞬撃」

義弘は炎蓮の手前で飛び上がり剣を寝かせて炎蓮に叩きつけようとした。

(剣を寝かせた？、どんな意図があるんだ、だがとりあえず)

炎蓮は当たるすれすれに右に避けた、そして炎蓮が元いた場所に剣が叩きつけられた、すると炎蓮はその隙に義弘に斬りかかろうとした、だが義弘はニヤリと笑っていた。

「甘いわー!!、示現流浮舟!!」  
「!？」

義弘は斬りかかってくる炎蓮に向かって寝かせていた剣をそのまま右に振った、しかし炎蓮は寸前のところで防御した。

「馬鹿力がー」  
「まだじゃ」

義弘は右に剣を振りかぶった状態でさらに連撃を炎蓮に浴びせた、炎蓮はまた防御したが義弘の剣圧で吹き飛ばされた、しかし炎蓮は受け身を取り剣を構えた。

（何て力だ、剣で受けたのにまだ手が痺れてやがる、しかもあんな隙のねえ連撃を打ち込んでくるとはな、一矢報いるのがやっとか）

炎蓮がしたり顔でニヤリと笑うと義弘の体が斬れ一筋の血が流れていた。

（あの一瞬でおいの体を斬りつけるとは、やはりいつの世も虎の名を持つものは油断できん、ん？）

義弘が剣を構え直そうとすると近くの草むらから変な気配を義弘は感じた、そしてそれは炎蓮や雪蓮たちも感じ草むらを睨み付けた、「こげん楽しか勝負邪魔すつとは、おまはんら礼儀が分かつたらんね？」

「たく良いところだったのによ、出てこいすぐに殺してやるからよ・・・」

全員が草むらを凝視していると広場の回りを白い装束を着たものたちが取り囲んだ。

「なんねこんものたちは」  
「見たことねえな、白いってことは件の黄巾の野郎共でもねえし」  
「母様!!」

「来るな!!、それよりもおめえらは村に行け、コイツ等が向かってねえとも限らねえ」

「分かったわ」

雪蓮たちは村に向かって走った、そして義弘と炎蓮は背中合わせに立ち剣を構えた。

「義弘後ろは任せな」

「頼もしか、おまはんの後ろもおいに任せんしやい」

時は少し戻り炎蓮たちが白装束を着た者たちに囲まれる少し前信玄と謙信の勝負が始まり、幸村とかすがたちはそれを少し離れた木の下で見っていた。

「やはり私では・・・」

「暗い顔してどうしたんだい♪」

「貴様何処から!?!」

かすがの呟きに答えたのは木上にぶら下がった佐助であった。

「何落ち込んでんだよ」

「いや、やはり甲斐の虎はあの方にとって特別なんだなと思ってるな」

「そりや宿敵だからな」

「甲斐の虎が倒れてから謙信様はもうこの世に興味が無くなったかのようにだった、私がどれだけあの方のそばにいてもそれは変わらなかった、しかしそれを甲斐の虎は目の前に立っただけで謙信様の目を変えた、それが悔しいんだ」

かすがは拳を固く握ったすると彼女の手から血が流れるのを佐助は見た。

「ふーんなるほどね、でもさ俺様からしてみればお前だって上杉にとつちやかなり特別だと思っけどな」

「私が・・・」

「ああ、確かにお館様も上杉にとっては特別だろうが、それはお前のはまた違ったものじゃないのか?」

「・・・」

「俺様はお前や前田の風来坊がいなかったら今の上杉は無いと思うけどな」

「!?!」

すると佐助はかすがの目の前に顔を近づけて満面の笑みを見せた。

「どうだ？元氣出たか？」

「ふっ、まさかお前に教えられる日が来るとはな・・・!？」

かすがはふつと笑ったすると何処からか見られてるような視線をかすがや佐助そして幸村や慶次もそれを感じ武器を構えた、すると戦っていた信玄と謙信もその視線に気がつき剣激を中断し周りを見回した。

「謙信」

「どうやら無粋な者たちがいるようですね」

信玄と謙信が戦いをやめ一刀の方を見て幸村たちに合図を送った、すると一刀の近くにいた幸村たち全員が武器を構え辺りを見回していた。

「一刀、某たちから決して離れるな」

幸村と佐助は一刀を守るように一刀の後ろと前で武器を構えた、それを見ていたかすがと慶次も一刀を守ろうと四人で円形の陣を組んだ、そして信玄と謙信も互いに背中合わせに武器を構えた、すると森の中から孫堅たちのところに現れた倍を越える人数の白装束の軍団が現れた。

(こやつ等何者じゃ?)

(この気配人ではありませんね)

「黙りとは不気味だねえ」

「気を抜くな慶次!!」

「佐助一刀を守るぞ」

「承知!!」

白装束の兵たちは二手に別れ信玄と謙信、そして幸村たちを囲み槍を向けた。

「この程度でワシが討てると思うてか!!、動かざる事山の如し」

「神烈!!」

信玄は大地を隆起させ謙信は高速で白装束の兵を斬っていった、しかし白装束の兵たちは次から次へと沸いて出て来ていた。

「千両花火!!」

「恋つづり!!」

「闇消!!」

「影舞いの術!!」

幸村たちも得意技を放っていくが倒れても白装束の兵は何処からともなく湧き出てくる。

(これはどっかに術者がいるな)

佐助はそう感じると神経を研ぎ澄ませ辺りを探りだした、そして佐助は突如手裏剣を少し離れた木の上に向かって投げた、すると戦った白装束の兵士が全員姿を消した。

「手応え有りつてどこかな」

佐助は戻ってきた手裏剣をキャッチするとニヤツと笑った、するとその木の下から拍手が聞こえた。

「流石は戦国でも指折りの忍、うまく隠れたつもりでしたが見つかってしまいましたか」

すると木の下から眼鏡をかけ導師の身なりをした男が現れた。

「主がこんな無粋なことをしたのか」

「申し訳ありません信玄殿、しかしどうしても殺したい男がいますね」

「殺したい者じゃと?」

「ええ、その北郷一刀をね」

すると皆は一刀に視線を向けた、一刀はどうして自分が狙われているのか心当たりがなく戸惑っていた。

「俺は君にあったことないと思うんだけど」

「ええ、ですが私たちは貴方にどうしても死んでほしいんですよ」

「お主名は何と申す?」

「我が名は于吉、次は必ず仕留めて見せますよ」

そう言い残すと于吉は姿を消した、そして佐助とかすがが気配を探ったが見つけることは出来なかった。

(于吉、確か孫策を死に追いやる導師の名であったか?、その者が孫策ではなく一刀を狙うということは、一刀にはそれだけの価値があるということか・・・)

于吉の真意は分からないまま信玄たちが于吉の消えた方を見てい

ると後ろの草むらが動いた。

「誰だ」

「俺たちだ信玄」

草むらから現れたのは炎蓮と義弘の二人だった、話を聞くと二人のところにも白装束が現れたが急に消えたと言う、そして二人は信玄たちのところにも現れたと思いい勝負を中断し信玄たちの元に来た、信玄は炎蓮と義弘と謙信連れ一刀から少し離れた、そして一刀の事や于吉の事を義弘や謙信に説明し出した。

「私たちの世界と似て非なる世界から来た少年ですか・・・」

「おいにはよう分からんが、あのわっぱはおいたちとは別の世界から来たちゆう事ね？」

「まあ簡単に言えばそういうことじゃな」

「しかし一刀を狙う理由が分からねえな」

「それはワシにも分からん」

炎蓮は一刀にちらりと目を向けると次に義弘と謙信に目を向けた。

「とりあえずその話は後回しだ、謙信 義弘お前らの話をしてえ」

「おいたちの話？」

「ああ、お前ら全員俺のところに来いよ、信玄にも言ったが在野で放浪するよりか情報が多く入ってくるぜ、あんたたちの世界に帰る方法も早く見つかるはずだ」

「おまはんと勝負もけりばついとらんからの、おいはそれでもよかよ」

義弘は炎蓮についていくことに決めたが謙信は炎蓮の目をじっと見ていた。

「あんたはどうするんだ？」

「・・・そうですね甲斐の虎が認めたその実力!？」

謙信が言い終わる前に炎蓮は謙信に向かって斬りつけた、謙信はすんでのところまで剣で受け止めつばぜり合った、かすがはいきなり斬りつけた炎蓮に向かって行こうとした。

「貴様、謙信様に何て事を!!」

「来てはなりません!!」

謙信は今かすがが近づけば炎蓮に斬られると確信しかすがを制止した。

「悪い我慢できなかつた、義弘との不完全な闘いにさらにあんたの闘気にあてられてな」

「島津殿との戦いで足に限界が来ているように思えますがいいのですか?」

「構わねえさ戦場にいれば万全の状態で戦えることの方が少ねえからな」

謙信は炎蓮のその言葉を聞くとつばぜり合っていた炎蓮を弾き飛ばした、弾き飛ばされた炎蓮はすぐさま剣を構えた。

「貴女が虎の名を名乗るに相応しいか見極めましょう」

「面白えやってみろ!!」

江東の狂虎対軍神の戦いの火蓋が切って落とされようとしていた。

## 9話

(アイツの言うとおり俺の身体は限界に近い、一気に勝負をつけるしかねえ)

炎蓮はそう考えると謙信に猛攻を仕掛けた、対して謙信は冷静に炎蓮の攻撃を捌いていた。

「流石は甲斐の虎の認めた女性ですね、しかし!!」

謙信は炎蓮の攻撃の合間の一瞬の隙を逃さず剣で炎蓮を斬りつけ吹き飛ばした。

「私に一撃入れるにはまだ足りません」

謙信は炎蓮の限界を感じ剣を納め背を向け立ち去ろうとした。

「謙信剣を抜けー!!」

「!?」

突如信玄がそう叫ぶと謙信は即座に剣を抜き炎蓮の方を向いた、すると炎蓮が既に目の前まで迫り今まさに謙信を斬ろうとしていた、謙信はすんでのところで防ぎまた炎蓮を吹き飛ばした。

(私が気配を読めなかった?)

謙信がそう思っている中それでも炎蓮は謙信に向かって斬りかかろうとした。

(母様凄い・・・)

(炎蓮様ここまでとは・・・)

雪蓮と祭は炎蓮の突然の行動に驚きを隠せずにした、すると隣にいた信玄が走って謙信と炎蓮の方に向かった。

(流石に手加減できませんね)

謙信が炎蓮に向かって剣を振りかぶり斬る覚悟を決め、炎蓮も謙信を殺そうと剣を振りかぶりながら突進してきた。

「!?!」

二人の攻撃が互いの身体に当たるまさにその時信玄が二人の武器を持つ手を掴み戦いを止めた。

「甲斐の虎」

「二人ともそこまでじゃ」

信玄のその言葉で先に倒れたのは炎蓮だった、雪蓮は母を心配しすぐに駆け寄った。

「母様!!」

「安心せい気絶しておるだけよ、じゃが気絶したのは今ではないがな」  
「どういうこと?」

「気絶したのは謙信が最初に炎蓮を吹き飛ばした時よ、あの時既に炎蓮に意識はなかった、しかし身体だけは謙信に立ち向かうことを止めなかった、気を失っていたから気配を感じず謙信は反応出来なかった」

「感謝します甲斐の虎、私も孫堅殿の目を見て戦いを納める時を伺っていたのですが中々その機会を掴めずいました」

「それにしても気絶しても戦うなんて我が母ながら恐ろしいわね」

雪蓮たちがそんな話をしていると炎蓮が目覚まし、そしてゆつくりと立ち上がった。

「くそ、途中から記憶がねえ勝負はどうなった」

信玄はあつたことを包み隠さず話すと話を聞き終わった炎蓮は謙信に頭を下げた。

「悪かったな迷惑かけちゃった」

「いえ、お陰であなたの实力を知ることができました、孫堅殿」

「炎蓮だ」

「?」

「俺の真名は炎蓮だお前たちに預ける」

炎蓮は謙信だけでなく義弘やかすがや慶次にも真名を預けた、すると謙信は炎蓮に手を伸ばし炎蓮はそれを掴み立ち上がった。

「で、謙信たちはどうするんだ?」

「貴女の戦いに興味が湧きました、剣と慶次共々ご厄介になるとしましよう」

「ならよろしく頼むぜ」

炎蓮と謙信は固く握手をし仲間になることを承諾した、そして義弘と謙信は雪蓮たちにも挨拶を済ませ一刀に近づいた。

「改めて私は上杉謙信です、こっちは私の剣のかすがと慶次です、以後

お見知りおきを北郷殿」

「おいは島津義弘じゃ、よろしく頼むど北郷どん」

「俺は北郷一刀って言いますこちらこそよろしくお願ひします……  
一つだけお願ひを聞いてくれませんか？」

「なんね？」

「俺に剣を教えてもらえませんか？」

一刀のその言葉に義弘と謙信の目が鋭くなった。

「剣か、北郷どんおいたちの剣は戦場で人を殺す剣ね、それを知って教えてくれと言うとね？」

「はい、さっきの于吉の言葉じゃこれから俺は命を狙われます、その度に幸村たちに迷惑をかけるわけにはいきませんから」

「北郷殿」

今まで黙っていた謙信が口を開き一刀の目を見て鬨氣を一刀に向けて放った。

(な、なんだこれ全く動けない)

一刀は謙信の鬨氣をくらい身動き一つ取れず汗が滝のように流れた、それを見た謙信はゆっくりと一刀に近づいた。

(俺殺されるのか……)

謙信は一刀の目の前まで来ると鬨氣を収め肩にゆっくりと手を置いた、すると一刀は膝から崩れ落ち息が荒くなっていた。

「はあはあ」

「よく頑張りましたね」

「え？」

「私の殺氣を間近に受け立っていられるものは日本の本にも多くありません」

「でも俺は動けませんでした」

「しかし私から目を背けなかったそこに意味があります」

「そのとおりね」

すると謙信と一刀の間に義弘が割って入った。

「おまはんは戦をしたことない世界から来たそうじゃな」

「俺の世界にも戦はあることはありますが、俺はしたことがありませ

ん」

「戦をしたこともない人間が軍神どんの殺気を受けたら気絶するはずね、しかしおまはんは目を離さず立っていた、おまはんには武人として最も大事なものが備わつとる」

「それは？」

「心の強さね、心が強くないもんはいくら鍛えても脆いもんよ」

「心の強さ……」

「まあそれだけでは勝てんがな、まあ安心しんしゃいおいと軍神どんがちやんと鍛えちやる！」

義弘は拳で胸を一回叩き謙信もコクリと頷いた、すると炎蓮が一刀に近づいてきた。

「一刀強くなれよ、俺も雪蓮たちもそれを強く望んでるぜ！」

「はい!!」

炎蓮の言葉に一刀は強く頷いた、そして炎蓮たちは謙信たちを連れて建業へと帰っていった。

## 10話

謙信たちが加入してからちようど一ヶ月が過ぎようとしていたあの日の朝、呉の将たちは評定を開いていた。

「評定を始めます、まず黄巾党ですが謙信殿たちの活躍もあり追いつくことが出来ました、しかし黄巾党は今や大陸全土に広がりを見せ、官軍も中央から軍を出してはいますが軒並み苦戦しているようです、そして黄巾党の勢いは留まるところを知らず現在は八十万もの兵力に膨れ上がっているとか」

「は、八十万!? 誠にござるか冥琳殿」

「幸村よ怯えるでない、所詮は農民あがりの賊よ指揮しているものを打てば蜘蛛の子を散らすように逃げていくわ」

「しかし甲斐の虎よ、いかに賊うちゆうてもその数は感化できんぞ?」

黄巾党の信じられない数に集まった将たちがざわついた。

「まるでたちの悪い流行り病のようじゃな」

「雷火殿中々うまい例えをなさいますね」

「黄巾党は張角、張宝、張梁の三姉妹によって率いられているようです」

(やつぱり張角たちも女性なのか、まあもう驚かないけど)

それと少し前に丹陽郡を預かる劉耀殿が黄巾党と戦ったの報告がありました」

「ほんと冥琳!？」

「ああ、惨敗して丹陽を捨てて逃げたらしいがな」

「惨敗・・・」

雪蓮は一刀と出会ったときに会った大史慈のことを思っていた、すると信玄が雪蓮の肩に手をゆつくりと置いた。

「大史慈のことが心配なのは分かるがあのもは強いそう簡単にはやられたりはせん」

「そうね、またいつか会いたいわ」

「しかし冥琳よ丹陽が空いたのは俺にとっては好機だな、まあ黄巾党を追い返さないといけないが」

「はい、今炎蓮様が黄巾党を追い払えば丹陽も炎蓮様のものとなるでしょう、それに」

「それになんだ？」

「朝廷から勅命が下りました、丹陽の黄巾党を殲滅せよと」

「規模は？」

「勅命には五万と」

冥琳から話を聞くと炎蓮は勢いよく武器を持ち立ち上がった。

「野郎共戦の準備だ、丹陽から黄巾の奴等を叩き出すぞ」

炎蓮の言葉にその場にいた全員が頷いた、そしてそれから三日後炎蓮たちは軍を整え劉耀の旧領の丹陽に軍を進めた、出陣したのは兵力三万と炎蓮 雪蓮 祭 冥琳 信玄 幸村 謙信 一刀の九人で残りは建業で守備を任せられた、炎蓮たちが丹陽に着くとそこには十萬の黄巾党が陣を敷いていた。

「これは・・・」

「冥琳どこが五万なのよ、その倍はいるんじゃないの？」

「うむ十万ぐらいはおるな」

「なんとという数じゃ、粹玲も連れてくるべきじゃつたな」

「しかし大部分は農民が蜂起した賊、一人の武はたいしたことはないでしょう」

「そうだとすると謙信公あの数は」

「朝廷の奴等に一杯食わされたか」

「恐れながら炎蓮様ここは」

「夜襲だな？」

「はい無理に全軍を相手にせずとも、夜襲を掛ければ、農民の軍です蜘蛛の子を散らすように丹陽から出ていくでしょう」

「よしなら俺が行く」

「しかし炎蓮様が行くのは危険です」

「この中で信玄たちを除けば俺が一番強い、それに武名が轟いていればいるほど敵も動揺するしな、江東の虎の名前なら不足はねえだろ」  
「それはそうですが・・・」

冥琳はそれでも炎蓮一人で行かせることを渋っていた、すると信玄

が冥琳の肩に手を置いた。

「冥琳よならば甲斐の虎も共に行くならどうじゃ」

「信玄公!？」

「信玄と肩を並べての戦か面白え!!、祭お前も来いお前は俺たちの退路を作るんだ」

「御意!」

「幸村お主も祭と共に行け!!」

「承知しましたお館様!! 必ずや退路を作ってみせますぞー」

「これなら問題ないな冥琳」

「はい、では私と雪蓮と謙信公と一刀は何かあったときのために本陣で待機しています」

「それで良いじゃあてめえ等暴れるぞ」

「「応」」

炎蓮の言葉に信玄と幸村と祭は答えた、江東の虎と甲斐の虎との共演が今始まろうとしていた。

その頃そこから少し離れたところに金髪のツイントールをカールさせた少女が立ち炎蓮たちのいる方向を見て笑っていた。するとそこに猫耳のフードを被った少女が近づいた。

「華琳様、物見からの報告が届きました」

「そう、何だつて?」

「華琳様の危惧していた通り黄巾党は十万の軍勢を用意していたようです」

「朝廷ももう終わりね、それで他には」

「はい、そこに江東の孫堅の軍が陣を敷いたようです」

「孫堅の兵力は?」

「三万とのことですよ」

「随分少ないわね(私たちの軍は六万、もう少し早く出るべきだったわね)」

「いかががしましょう華琳様、このまま静観なさいますか?それとも」

「あら桂花私はその知らせを聞いて静観すると思っているの?」

「いえ、では兵たちに行軍を急がせます」

「ふふふ、よく分かつてるじゃない」

すると猫耳のフードを被った少女は金髪の少女から離れていった、そして交代するかのように頭に三日月の兜をかぶり眼帯をした男が少女に近づいてきた。

「桂花の次は貴方？、なんのようかしら」

「ご挨拶だな、俺も風に吹かれたくくなってな、それに」

「それに？」

「この先にライバルがいるとなったら血が騒いでくるぜ」

「やつと貴方の世界の強者に会えるのね」

「ああ楽しみにしとけ、派手な party の始まりだ!!」

男の楽しそうな顔見た少女はフツと笑うと炎蓮たちの元へ軍を進めるために二人で隊列に戻っていった。